

目次

巻頭言「核」廃絶への切なる想い	植田英一	1
東日本大震災から4年	仲條拓躬	2
★特集 SNSでの投稿記事を紹介 勇者は懼れず 仲條立一	仲條立一	3
◆石原莞爾の「戦後」を歩く② 岩崎章次	岩崎章次	7
◆零戦とはどんな 戦闘機だったのか 山崎八九生	山崎八九生	8
◆図書紹介 大東亜戦争肯定論 中国・抗日戦争70周年式典	仲條拓躬	13
◆会員だより 総会のお知らせ	連載⑦	14
◆昭和天皇の御製 岩崎章次	岩崎章次	15
●編集後記		16

宣言(昭和31年協和会「昭和革新論」より)

- 1、人類歴史は最終戦争時代に突入し、世界の統一は眼前に迫った。われらは最小の犠牲をもって、新しい歴史を開こう。
- 2、都市解体、農工一体、簡素生活、この三原則によって新日本を建設し、搾取と戦争のない、人類次代文化の先駆となろう。
- 3、東亜に対する過去の態度を深く懺悔し、まず近隣と道義によって固く結び、ひいて永久平和の実現に邁進しよう。

「核」廃絶への切なる想い



本会顧問(前会長) 植田英一

「核」廃絶の時代なのに、毎日放射能に悩まされた生活をしなければならぬのが福島県の現状です。国を始めそれぞれが懸命の努力をしているようですが、変化は感じられません。

三・一一から四年が経過し、漸く中間貯蔵対策も合意になった様で、新しい村づくりにも進む様ですが、現地の市町村の苦境は想像を絶するものがあることを痛感する毎日です。

放射能災害は他の災害とは大きく異なります。他の災害は家庭、地域、自治体が頑張ろうとの心の結束ができます。しかし、放射能災害は心の分断です。長引く先行き不透明な避難生活により、元々は一軒の家に一緒に住んでいた高齢者世代と子供、妻と夫、すべてが以前と異なる生活を強いられています。

飯館村の菅野村長さんは、「この災害から学ぶことがあるとすれば、経済、カネ優先からの発想の転換、成熟社会の在り方を考えていく機会とすべきではないか、もっと便利に、もっと豊かにを追求すると、当然もっとエネルギーが必要になる。そして人間の手では解決できない危険な原発が増えて行くことであってはいけない。少しでも危険な物を減らし、世界から尊敬されるような国になるように次の世代にバトンタッチしていかないと、この原発事故から何を学んだのかということになってしまふ。私達の避難生活がただの無駄になってしまふというのではあまりにも辛すぎる」と言われておりますが、正に私も同感であります。

私共石原莞爾平和思想研究会は、平和のモデ

ル国家を建設することが目標であることから、平和モデル国家三原則を基本に運動を続けております。中でも「簡素生活」が最重要課題として取り組んで来た意義は、今度の大地震、そして再建の最重要要素であると断ずるのが我々の使命ではないかと、私等勇気付けられた感じであります。

一方、安倍総理を先頭に、福島反省どころか、原発再稼働に党や原子力関係者を総動員して対応し、川内原発の稼働を決定し逐次勧める様相は、我々としての対応を迫られていると考えます。

私が原子力に関心を寄せたのは、広島、長崎のアメリカによる原爆投下の大惨害、ビキニ環礁における米国の水爆実験と第五福竜丸の被曝、そして福島県の大災害による大被曝、ビキニ環礁における水爆実験を見たアインシュタインのパートランドラツセルのロンドン声明「人類が戦争を放棄するか、水爆によって人類が絶滅するか二者択一」には特に感銘深く覚えました。

あれから60年、私は福島県議会に籍を置くようになり、事故の度に東電と接触するようになり不信を覚え、「核」に対し反対になりました。県議の政務調査会長時、アメリカの地下核実験反対、ソ連の地下核実験反対決議、イラク戦争反対決議をしました。

今、福島の事故に会い、本県の原発全炉反対の先頭に立っています。それを重要な任務と感じています。参加者は全員思想信条を問わず参加しています。

また、核戦争の危機を思うと、「全世界から『核』を排除し、一路平和へと前進を願うこと切なるものあり」です。

植田英一(うへだ・えいいち)……大正14年(1925年)福島県郡山市生まれ。福島県酪農協同組合代表理事組合長、福島県土地改良事業団体連合会副会長、郡山市議会議長、自由民主党福島県連政調会長・幹事長、福島県議会議長、全国都道府県議会議員会会長、地方制度調査会委員、福島県新農政研究会理事長、本会会長など多数を歴任。

東日本大震災から4年



本会会長 仲條拓躬

被災地を訪問してあらためて復興が思うように進んでいないと実感しました。被災地では当然のことでしょうが瓦礫の山は姿を消し、いたるところでダンブカーが走り回り、巨大なクレーンが山を崩し、コンベアーで土を移動してどんどん埋め立てていました。建築工事も行われており、それを見る限りでは復興が確実に進んでいるかのように思えます。

しかし、あまりにも巨大すぎる被災地を見るとこの先、何年かかるのだろうかという気持ちになりました。土地を失った被災者たちの移転先の土地の高騰は想像以上で、簡単には新しい住宅を入れることが出来ないといえます。自分が住んでいた土地で生活再建できる人と移転させられる人に分断され、かつてのコミュニティの維持が難しくなっています。

被災者が言うには、行政も計画を請け負っている業者も、都市計画の専門家がほとんどで、農業や農村のことが全くわかっていないといえます。神戸の街は震災後何年か経って行ってみると見事に復興していました。どこが被災地だかわからないほどです。だが、地域の中小企業や小売店は打撃を受けたままで、大企業などが真実を覆い隠しているという。

逝去された俳優の菅原文太氏は、「これで日本は変わるのではないか」と期待していました。菅氏が、「結局何も変わらなかった」と嘆いた。菅氏は、富める者だけが富む社会、個より国の優先を強いる強権的社会、食や農業を軽視し、環境より経済を優先する社会に憂い、3・11がこのような風潮に一石を投じることを期待し、裏切られたと感じたのでしょう。

このような状態であるのに原発再開の動き、戦時中を思い起こさせるような秘密保護法、集団的自衛権、原発反対や放射能の恐怖を語る朝日新聞に異常とも思える朝日新聞叩きを見て思う事は、安倍総理はやはり東京電力のグループ会社から献金を受け取っていたのかということだ。

鬼の首をとったようなマスコミに偏狭なナシヨナリズム、先の見えないアベノミクス。一体この国はどの道に進もうとしているのであろうか。地方の衰退が想像以上に進んでいる中で、国辱的TPPの妥結も日程に上がっています。

このままでは日本の劣化は加速的に進んでしまうし投票権の無い子ども達につけをまわしてしまいうことでしょう。

3月11日で東日本大震災から4年



巨大なコンベアーで土を移動し、崩れ、切り交わった山を乗り越え、行き交う重機が大きい。 (越前高田)

です。5年目に入りました。この間、広島島の土砂災害を始として、伊豆大島の地震、御岳山の噴火、台風や雪害など自然災害によって、被災し亡くなられた方も大勢いらっしやいます。阪神淡路大震災から20年、新潟県中越地震から10年、東日本大震災から5年目という節目となりました。



元は3階建てだったが、津波でダルマ落としのように下階が潰れ、最上階のみが残った。(気仙沼)

東日本大震災は天災というより人災がこれから人間の寿命をはるかに超える期間、人類を苦しめていくことでしょう。今後、放射線による死人を出さない政治姿勢から、言論統制、報道規制等黙殺を謀ることは必須でしょう。真実を覆うことでしか成り立たない原子力発電・原子力産業の闇構造が、あらわになっていきます。

「美味しんぼ」の作者は、主人公らを通して次のようなメッセージを伝えていきます。(作品から引用)「真実を語るしかない。福島は未来は日本の未来だ。これからの日本を考えるのにまず、福島が前提になる。特に子供たちの行く末を考えてほしい。福島の復興は、土地の復興ではなく、人間の復興だと思うからだ」。政府はこの漫画の発言すら圧力で封じ込めたのです。